
緋色の記憶

布袋しぐれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋色の記憶

【Nコード】

N3890Z

【作者名】

布袋しぐれ

【あらすじ】

突然失った幸せの日々。同胞たちは、すべて瞳を奪われ、殺された。その瞳のために、殺された。

闇市場で高値で取引される、『緋の目』のために。

そのための手段など選んでいられない。けれど、その道を邪魔する男がいる。

妙な奇術師、ヒソカ。言いようのない、なぞめいた男。彼が、私の行く手を邪魔する。乱す、この復讐の道を。

ヒソカが私の心臓を止める前に、蜘蛛の心臓をつぶす。たとえそれ

が、私ひとりになっていたとしても。

偶然の出会い

殺された、いなくなった、同胞たち。必ず、仇をとると、幼馴染は言った。必ずや、この同胞たちの目を、取り戻してみせると。

私たちは、特異な民族だった。感情が高まると、瞳が鮮やかな緋色に変化する。それゆえに、苦勞することは多かった。闇市場でかなりの高値で取引されていたことは、周知の事実だったから。私たちは、自分の身を守るための、護衛術は心得ていた。この血は、途絶えさせてはならない。とても、小さな頃、そう長は言っていた。記憶に残っている。

その翌日、私たちクルタ族の同胞たちは、目をひとつ残らず、奪われた。

目の前が真っ赤になった。生き残ったのは幸運だった。幼馴染と、たまたま少し山を越えた向こうに、出かけていたから。食料を、探すために。力が抜けたように、籠が手から滑り落ちた。

「・・・父さま・・・？」

「・・・幻影旅団の・・・し・・・」

「クラピカ？」

「くっそ・・・幻影旅団の仕業だ・・・」

「・・・なんでそう言えるの」

「前に聞いた、長おさからも・・・同胞が、襲おさわれたと・・・蜘蛛の刺青の入った、やつに」

「・・・それって・・・」

「・・・ああ・・・そのときも、目は奪われていた・・・居場所が、バレていたんだな」

「随分と、冷静ね」

「・・・いいや、冷静に見えるか？」

「分からないわ・・・私、もう目の前真っ赤だもの」
「私もだ」

「・・・クラピカ、私たち、どうすべきなのかな？」

「目を、取り戻そう」

深いため息を同時に、クラピカは小さく、それでも力強く言った。
次第に感情も落ち着いてきて、目の前がクリアになる。頭に血が上ったせいか、少しぼうつとするが。

「どうすればいい？」

「どうすればいいのか、分からない」

「・・・私、闇市に紛れ込もうか？」

「ば・・・そんな危険なまねをするなっ」

「うーん・・・でも情報は入れられるかもよ？その、幻影旅団？
の情報も手に入るだろうし」

「何を考えているかと思えば・・・くだらないことを言うな」

「でも、それ以外に、方法ってある？」

「・・・それは」

「いいの、私なら大丈夫。クラピカの心配には及ばないわ」

「・・・心配はしておらぬさ」

「まあ、随分なもの言いね」

「クルタいちの術師が」

「護衛術だけだね」

「・・・連絡は必ず、取り合おう。週に一回は、かならず・・・
そうだな、ここで」

「・・・危険じゃない？」

「大丈夫なのだろう？」

「分かったわ、クラピカ」

「ああ」

「・・・ねえ、クラピカはどうするの？」

「私か？私なら心配ないさ。情報を集めるよ」

「・・・集める？」

「ああ」

多分、これがきつかけだっただろうな。

私たちはそれぞれ分かれて、この日以来、一週間ごとに会っては、情報を交換していた。最も、ほとんど収穫はなかったのだが。

しかし、その生活が数ヶ月続いた、ある日、会うことはなくなった。来る日も、来る日も待っても、クラピカは来なかった。何があったのか、聞く術もなく。私たちは、共に17歳になった。

闇市場は、反吐が出そうなほど、気持ちの悪いものの好きの連中もいる。黄色の髪色に、茶色がかった瞳。この容姿だけでも、十二分に目立つというのに。クラピカに最後にあった日に、貰ったカラーコンタクトをいれていても、やっぱり目立つものは目立つ。

「お嬢ちゃん、君、いくら？」

「・・・売り物じゃないわ」

「機嫌が悪いね、どうかしたのかい？前の客の気前が悪かった？私はその10倍はだそうか？」

「うるさないあ・・・売り物じゃないって言っているのが聞こえないの」

「ん？」

「このっ・・・腐れ変態野郎！」

「うつがうつ！？」

男の顎に蹴りを入れると、一瞬、顔が緩んだ。とんだ変態だったみたいだ。とりあえず、ひと安心。

「お見事」

「誰？仲間？」

「いいや。ボクはただの通りがかり」

「何？」

「素晴らしい蹴りだったね、何か習っていたのかい？」

「まあね」

「そうか、いつかお手合わせ願いたいものだ」

「（そんな真面目なヤツに見えない・・・）いいわよ、私はマリ
ア」

「うん、マリアね。ボクはヒソカ」

「・・・ふうん・・・」

「それにしても、君、随分と若そうだけれど？」

「失礼ね、もう１７よ」

「ここがどこか分かってる？」

「分かっているわ。愚かじゃない」

「愚かじゃなかったら、ここにいないんじゃない？」

「事情って人によるでしょう」

「・・・うん、そうだね。気に入った。お茶でもどうだい？疲れ
ただろう？」

「・・・いいわよ」

偶然って、本当に恐ろしいものね。

柔らかな微笑み

オレンジ色の、さらっとした髪を、風にたなびかせるのを楽しむかのように。かすかに、目を細めたように見えた。

重たげな二重が、ゆっくりと瞬きして、また私を捉えた。目の端とか、そんなんじゃないかって、きちんと。

「・・・何？」

「いや、別に」

闇市場から抜けた、少し洒落たカフェテラスに座っていた。アンティークな椅子と、茶器。普段の生活からは程遠い場所だ。

「さつきから・・・何？」

「つれないなあ・・・クツクツ・・・」

「（気味悪いなあ）」

「・・・君、あそこになんで居たの？」

「言えない。企業秘密ってやつかしら」

「・・・企業？」

「（まずい）所属はないんだけど」

「ふうん」

「あなたこそ」

「ボク？ボク、暇だったから・・・変わったものでもないかなあ・

・
って」

「・・・娼婦おんなでも探してるのかと思った」

「んゝ、そう見える？残念、かも」

「・・・そうには見えないけれど」

「まんざら、間違いでもないけれどね、ボク、変態らしいし」

「・・・昼間からジョークが過ぎるわ」

「よく仕事仲間に言われるんだよ」

「気にする必要もなくて？」

「・・・そう言ったの、君が初めてだよ・・・可笑しい」

「・・・あらそう」

じつと食い入るように見られることは少ないからか、少し変な感じがする。

「元は良いのに」

「え？」

「ううん、なんでもない」

「顔に何かついてる？」

「そういうのじゃないよ、気にしないで」

「・・・気になるわ」

「君、元は良いのに。飾らないのかい？それくらいの歳だろう？」

「うーん・・・気がついたら、この歳って感じだから・・・分かんないなあ・・・」

「そっか・・・」

「何？」

「いいや」

そういうと、ヒソカは初めて、ともに目線をはずした。初対面の男に、ここまで口を割ったのは初めてだったから、少し疲れた。

「あなた、いつまでいるの？」

「ん？さあ」

「少し、寝ても良い？」

「今かい？」

「うん」

「ここじゃ、少し目立つからね・・・いいよ、寝てても。けれど、移動してても勘弁してくれるかい？」

「うーん・・・場所によるけれど・・・」

それよりも、眠たさのほうが、確実に勝っていた。

どうでもいいさ。成るようになるだろう。別に、危機感を感じないし。

私は、一気に眠りのふちに落ちた。

連絡が途絶えたのはいつだったか。いつかの日、確か、私はあの約束の場所に行けなかった。急な仕事を立て込んで、気付けば、日付もとつくに変わって。それ以来、会っていない。もう何ヶ月経っただろうか。確か、おとといは、彼女の誕生日であつたはずだ。毎年、欠くことなく祝っていたのに。今年はできなかった。毎年、何かは贈っていた。小さい頃、初めて贈った、『白い花』。名前は知らなかったけれど、美しかった。小さく、可憐に強く咲くその姿に、彼女を重ね合わせていた。

「もう少し、別れる前、手段を選べばよかったな」

呟いても遅い。連絡手段を与える機会は何度もあったというのに。愚かな、自分。憎い、自分が。心配はどんどん積もっていく。

顔の筋肉が、硬くなりそうだった。

「クラピカさん、仕事」

「あ、はい」

目の前のことで、いつもみたいに手いっぱいだった。

目覚めた夜

カーテンの隙間から、夜の景色がのぞいていた。真っ暗な中に、かすかなネオンが光る。

赤いカーテンの部屋。はて、ここはどこだろう。身体を起こすと、悪趣味なまでに赤いベットシートに目がいく。

「（ここは？）」

「おはよう、いや、こんばんは」

「どこ、ここ」

「ボクの部屋」

「あ、そう」

「今から、ボク、仕事だから」

「え？」

「寝ててもいいし、自由に使って」

「・・・いや・・・でも」

「誰か、待ってる？」

「いいえ、帰る場所はないから」

そう、帰るべき場所はない。今日だって、どこかで野宿か、安い宿を取るはずだったし。

「じゃあ、ね」

「・・・お言葉に甘えるわ」

「うん、良い子」

「・・・」

「しばらく居るといいよ」

「しばらく？」

「イヤになれば出て行けばいい」

「日数の話？」

「もちろん。好きなだけ、過ごせば良い。君に興味を持った」

「・・・娼婦じゃないわ」

「分かってるよ。ごめん、ごめん。じゃあ、ボクは一旦、仕事に行って来るから。朝になったら帰ってくると思うよ」

「分かったわ」

直ぐにヒソカは出て行ったようだった。扉の閉まる音が玄関のほうからした。

このベットはあの人と同じような、不思議な匂いがする。少し柑橘めいた、ミステリアスな香り。イヤじゃない。それよりも酷く落ち着いた。

「どうしよう・・・やることないし」

とりあえず、ベットから出ることにした。

あまりの仕事の多さに身が持たない。酷く、最近は疲れている気がする。仕事が終わると直ぐにベットに入って眠りにつく。シャワーを浴びるのも、最近は朝の日課になってしまった。面倒なのだ。夜はとにかく眠りたい。ハンターではないが、雇われの警備として名のあるグループの、ボディガードをしている。

ふと、無作為においてあった新聞に目が留まった。『ハンター試験、今年も開始』

「・・・ハンター？」

前々から気にはなっていた。一体、どういうものなのか。一般人が立ち入り禁止の区域にも、ハンターなら入れるらしい。莫大な資産も手に入ることもあるとか、ないとか。とにかく、今より随分と生活がしやすくなるそうなのだ。

「・・・好条件なのだが・・・一体、どういうものなのか」

考えては見たが、今はそれより、眠たさのほうが確実に勝っていた。とりあえず、眠ってしまおう。今、考えるのは無理だ。

頭まで深く、布団を被り、眠りについた。

「今日、スーツ？」

「やあ」

「ヒソカ、趣味変わった？」

「いいや、ちよつとね」

「いいと思うけれどね」

シズクは小首をかしげながら、そういった。

「今日はどうするの？」

団員からの、何気ない問いに、クロロが静かに口を開いた。

「盗みにいく。ヨークシンシティにあるビルにある、翡翠の涙だ」

「翡翠の涙？」

「計画を説明する。よく聞いておいてくれ」

「はい」

幻影旅団が、ひと暴れする。まるで嵐の前の静けさのように、街はいつもどおり、ネオンも煌いていた。

久方ぶりの夢の中

あまりに深い眠りについていたせいなのか。久しぶりに、夢を見てしまった。

あれは多分、村のはずれにあった、池。美しく風にたなびく木々の陰。ああ、懐かしい。水のおいも、何もかも、心地よく懐かしい。ああ、帰ってこれたのか。

村に戻ったら、先生のところに行って剣を教えてもらわなくっちゃ。ジュールたちに負けてる。早く、強くなって、一人前になりたいし。何より――

「クラピカ」

「・・・なんだ、いきなり・・・驚いた」

「驚かせた？ごめん」

「抜け出してきたのか？」

「お裁縫、苦手だもん」

「そんなの練習しなくては、うまくならないに決まっているだろう」

「そうだけれど・・・イヤよ、私も剣を習ってみたい」

「私たちの習い事だ。マリアはいけない」

「何でよ」

「私たちが剣を習うのは、守るためだ。マリアたちは、私たちに守られていればいい。それが私たちの幸せだ」

「・・・そう、悪い気はしないわ」

「素直ではないな」

「うるさい」

「戻ろう」

「ん？イヤよ、折角抜けてきたのに」

「どうやって？」

「”お腹痛い”って迫真の演技で」

「・・・あきれたものだ・・・」

「それで結構」

「・・・」

隣に黙って、また腰を下ろした私を驚いた目で見た。

「戻らないの？」

「いるのだろう、まだ」

「そうだけれど」

「剣の稽古は生憎、今、休憩中だ」

「休憩中？」

「ああ、怪我した」

「えっ・・・クラ」

「私ではない」

「・・・そっか」

「骨を折ったらしい。先生が手当てをしている、じきに終わるだろうが・・・まあ、いいさ」

「適当ね」

「マリアには言われたくないものだな」

私が笑ったように、そういうと、マリアはふてくされたように、そっぽを向いた。そういう顔も、可愛いと思いつ出した、最近。私の中にも、こういう感情はあったのか、と。妙にむず痒くって、恥ずかしくって。くすぐったかったけれど。

「失礼ね、本当に」

「・・・もう決まったのか？」

話題を、何気なく婚礼のほうに向けた。

私たちの民族では、女性は17を迎えたら、嫁ぐのが決まりだ。嫁ぎ先も、星の導き、相性も最も良い相手のところに決まる。マリ

アの場合、少しはなれた丘に住む、アステカのところだった。今年で25になる奴のところだ。

アステカは、少し口が重いが、剣は達人並み。先生の次に強いし、何より博学。それに、面白い人だ。私としても、それなら、というぐらいだった。

「決まったわ」

「嬉しく、なさそうだな」

「お兄ちゃんみたいに慕ってた人だもん。イヤだわ、関係が変わっちゃうの」

「大丈夫さ」

「・・・クラピカはいいよね、男の子だもん」

「・・・」

「心配ないじゃない」

酷く傷ついたように、笑う、マリア。痛々しかった。ごめんって、いえなかった。それどころじゃない、罪悪感と、嫌悪感が押し上げてきたから。

「マリア――」

「っ・・・」

息が苦しいくらい、つまっていた。一気に、溜まった息を吐ききると、肺が少し痛んだ気がした。

夢を見ていたらしい。あれは幼い頃の記憶。私たちがまだ、16だったころの記憶だろう。懐かしい夢を見たものだ。

しばらく、マリアには会っていない。元気にやっているんだろうか。何も、憂いていないことを願うばかりだ。心配事は、彼女には似合わない。彼女には、そんな顔、してほしくない。

「マリア」

返事の返ってくるはずのない、名前を呟く。

すると突然に、扉が強く開かれた。

「クラピカっ・・・起きていたか、まずい、翡翠の涙が奪われた！ 追うぞ」

「はいっ」

会いたい——・・・ たったひとりの同胞に。

夢を見た。とても懐かしい夢。駄々をこねていたあの頃。駄々をこねることも許されていた、守られていたあの頃。

「・・・懐かしいなあ・・・」

呟く、と不思議と、涙が出てきた。懐かしい、恋しい、戻りたい、帰りたい。お母さん、お父さん、クラピカ。会ってないね、とても長い間。会いたいよ、少しでも。連絡する術がないの。どうしても。会いたいんだろう。会いたいよ。どうしても、会いたいよ。恋しさが、積みもっていく。まるで、風に吹かれ、積もる落ち葉のように。積み重なっていく、感情。

赤いシャツが、さらに濃い赤に染まっていく。

視界が赤くなるのが分かった。ヒソカが戻ってくる前に、沈めなきゃ。忘れなきゃ。下手したら、殺されてしまうかもしれない。売られてしまうかもしれない。昔、この市場に出てきた頃は、よくあった。もうそんなのは、イヤだ。

鎮まれ、鎮まれ。忘れろ、忘れろ。大嫌いだ、この赤い目が。この目のために、殺された同胞。この目を持ったばかりに。苦しい、イヤだ。憎い、キライだ。

「戻って・・・」

苦しい。

こんなに目の赤い夜は、暗い同胞の瞳が嘆くようだ。私をただ見つめて、暗い瞳で。私を忘れてはくれないのね、同胞よ。

今、仇をうつからね。待ってて。苦しめないで。分かったから。
「戻って・・・」

「ただいま」

玄関から、そう呟いた。初めてかもしれない。マチがここに来たときすら、言わなかったのに。不思議な子だ、あの子は。

布団で眠る、マリアの傍のシーツは染まっていた。泣いたあとがある。涙の筋が、まだ、残っている。

「なにか、思い出した・・・のかな」

その頬を、さっと拭くと、静かにマリアは息をした。

優しくない朝日

日はまた昇る。希望の朝も、悲劇のあとの朝にも。同じように明ける朝が、あまり好きになれない。きつとあの日が、全てを決めてしまったんだろうね。本当なら、望むべき朝を、嫌ってしまっただろうね。寂しい、性。

「・・・」

「やあ、おはよう」

「いつから、そこに」

「君の目が覚める、三時間前から」

「・・・暇じゃなかった？寝なかったの？」

「うん、まあね」

「変ね」

「よく言われるよ」

「・・・何？」

「なんでもない。朝ごはんにでもするかい？」

「んゝ・・・ん」

「曖昧だね？」

「うん・・・あんまり食べるほうじゃないから・・・いいかなあ・

・つて」

「ああ、なるほどね」

「・・・」

「ボク、もうすぐしたら、数日空けると思う」

「数日？」

「うん。もしかすると数ヶ月かもしれないけれど（家に帰る習慣なかったし）」

「何をしにいくの？」

「うん？君も行くかい？ハンター試験」

「ああ、ライセンスの・・・いい。いらないから」

「そ。まあ、いいけれど（そっちのほう为好都合かも）」
「ん」

「自由にしてていい。この部屋も、家も。帰ってくる保障はできないけれど」

「いいよ、私、放浪癖あるし」

「また君に会いたいからね」

「・・・」

「じゃあ、そろそろ準備していくよ」

「え？もうすぐって・・・そのもうすぐ？」

「ん」

「・・・ばいばい」

「ばいばい」

多分、言葉を失うってこういうことを言っただろう。
しばらく、その場にぼうつと座っていた。

「ええっ、辞める？君の働きは十二分に評価をしたつもりだったんだけど・・・」

「そうではなくて」

「何が不満なんだい？」

「ハンター試験を受けに行きたいので」

「クラピカ君？何も、全て投げ打つ必要は・・・」

「分かっています。けれど、片付けてから行きたいんです」

「・・・そうか」

「お願いします、ボス」

「うん、うん、分かったよ、了解した。受理することにする」

「ありがとうございます」

「その代わり」

「・・・はい・・・？」

朝が嫌いだ。人と別れるにしても、夜別れるより、朝別れたほうがこたえる。精神的に参る部分が、大きい。私は、ずっとそう思っていた。

背を押す人も、ものも、何もなくなってしまった今。私は、そう思っていた。

失うものなど、何もない。崖っぷちでいい。誰かがそういつていた気がする。もしかすると伝記か、何かかもしれないけれど。少なくとも、その言葉が、私をここまで生かせている。

今日、やっと。今朝、やっと。嬉しく思った。朝が来たことが。朝、その始まりのありがたさが。

『その代わり』

『・・・はい・・・？』

『絶対、受かって来い』

『はい』

『応援している。ああ、これは餞別だ。せんべつ 持って行ってくれ』

『ありがとうございます』

『また、仕事をしたかったら、おいで』

『はい』

『いつてらっしゃい』

『行ってきます』

こんなに満ちた朝があること、今日まで知らなかった。希望の朝なんていうのは、タイトルだけじゃなかったんだ。

「・・・行ってきます」

優しくない朝日（後書き）

どうしてもヒソカの会話文に、ハートとか、スピードとか入れるの面倒で・・・ごめんなさい。ご了承を。

奇術師のおい

ヒソカからいつもしていた。クルタの最後の日のにおい。あの、村に帰ったときの、におい。無力感に、教われた。悲しい、におい。ヒソカからは、その断片的なおいがした。近づくたびに、脳の奥がしびれるような錯覚を覚える。それはどこか、悲しくて、懐かしい。あの幸せな記憶と、惨い記憶の断片が脳内を駆け抜ける。走馬灯みたいに。

ぎゅっと自分を抱きしめて。しっかりしなきゃって。いつまでもあの男の帰りを待っているわけにはいかない。情報を探さなくっちゃ。それが本命だもの。私は、そのために生きているんだから。

最初から思っていた。44番は、まずい。血のにおいを感じていた。

「クラピカvsヒソカ！」

審判役の男の、力強い始まりの合図で、幕を開けた。出来れば、この男と対戦したくなかった。あまり好ましい、対決ではなかった。望むといったら言葉が変だが、こんな試合は、望んでいない。

「イイよ、抜いて」

「・・・そのつもりだ」

トランプの、音がやけに耳に障る。集中したい。氣をとられてしまふ。私と、したことが。

「おっと・・・トランプは半分じゃゲームできない。君も同じだよ。それじゃ、つまんないから・・・しっかりしっかり持ってる」

「・・・失いはしないさ、絶対に」

「だとイイよね」

トランプが投げられた。ああ、馬鹿馬鹿しい。こんなのどう返っ

てくるか、分かりきつてるじゃないか。どういうことだ。こんな分
かりきつた軌道で、投げてくるなんて。

それより何より、ずっと微笑を絶やさないこの男。押し殺しては
いるものの、漏れ出す殺気は抑えきれないようだ。ひしひしと、目
に見えない細胞一つ一つに確実に感じていた。

「イイこと、教えてあげようか」

「何だ」

「君さあ、もう負けてるんだよね」

「なぜそういえるっ」

「フッフ・・・でしょ」

私が剣に目を向けたと同時に、そういった。ヒビが、入っている。
さっきの分か。いや、違う。さっきの攻撃はこれが目的であったか。
迂闊だった。

「1本でいい」

「・・・ねえ」

「何だ」

「ボク手加減してるんだけど・・・抑えられなくなっちゃうよ」

「・・・だからどうした」

「ああ、たまらないね・・・またゾクゾクしてきちゃった・・・

ああ・・・重なっちゃう・・・君、ボクの知り合いによく似ている
よ」

頭の隅に、マリアが過る。昔、よく2人でいたら、見分けがつか
ないといわれたことがある。血は、そんなに近くないのに、なぜだ
か顔は、瓜二つなのだ。最も、今でも多分、マリアが髪を切れば、
見分けはつかない程度だろう。少しマリアのほうが、小さいが。

「・・・」

「君によく似ている・・・声までも」

「だからどうしたっ」

「たまらないよ・・・彼女の戦い方を見ているようで」

「・・・っ」

やはり、勘違いではないかもしれない。ヒソカが言っているのは、紛れもなく、多分マリアのことだ。

目の前が真っ赤に変わる。

投げられたランプが、そっくりそのそのまま、ヒソカの肩に刺さった。

覚悟はしていたものの、やはり尋常じゃない。ヒソカの顔は、まるで狂気に歪んでいた。

でも、それとすぐに、さっきまでの顔に戻って、両手をあげた。まるで降参でもするかのように、こちらに向ってくる。

『——で、待ってるよ……それから……マリアも君も知り合い同士、かな。同じにおいがしたよ』

「……え」

「ボクの負けでいいよ。次で決めることにした。いいだろ、別に」マリアが、ヒソカと接触している——……？

待てないわ。待てないの。私のこの身は、ただクルタの復讐のためだけに。この心臓は動いている。また街にいかなくてはならない。行かなくては、ほしい情報も何も、得られない。

『お世話になりました』

紙切れをテーブルの上に残して、扉を閉めた。

さよなら、おかしな人。

意外な接触

仕事を預かった。よりにもよって、試験の帰りに。めんどくさいとか、思いつつもちゃんとしちゃうんだから。ちよっとお人よし過ぎるってもんかな。まあ、有料だけれど。

付き合いが長いから、仕方ないってところもあるのかも。まあ気まぐれだし。何より、今は仕事も入ってなかったからね。でも、ライセンスも取ったことだし、さっさと仕事したいんだけれどなあ――

漆黒の長髪を揺らし、ひとりで闇市場へ出向いた。

ヒソかに、頼まれた。随分と久しぶりの依頼かもしれない。いや、初めてかな・・・分からない。まあ、いいや。今回は殺人じゃないから、断ろうかとも思ったんだけれど。随分とイロをつけてくれたから、やることにしたけれど。普段なら、伝言程度に、わざわざ動いたりしないからね。

『イルミ』

『何？』

『頼まれごとがあるんだ』

『何？』

『頼まれてくれないか？』

『内容による。殺人なら無論構わないけれど』

『ああ、殺人じゃないよ。悪いけれど。伝言してほしいことがあるんだ』

『専門外だけれど』

『できないわけじゃないよね？イロ付けとくから』

『どれくらい？』

『そうだね・・・うん、一旦、30000。終わったら70000支払うよ』

『うーん・・・』

『伝言だからね・・・おそらく、家にはもういないと思うんだよ』

『家?』

『ボクン家』

『（近くに）家あったの?』

『失礼だなあ・・・まあいいや。うん、この前までは一緒に暮らしてただけだね。多分、出て行ったと思うから。探してほしいわけ』

『いいよ、そこまで言うなら、分かった。で、何?』

『.....って伝えてほしいんだ』

『分かった』

ハンター試験会場から、真っ直ぐ向ってきたけれど。2時間もかかるとは思わなかった。僅かな空腹感を感じ始めた。そういや、随分食べてないか。さっさと終わらせて、何か食べよう。

あの、出て行った日から。情報はこれっぽっちも掴めなかった。

約束の場所にも行った。けれど、クラブ力は現れなかった。何となく、分かりきっていたことではあったけれど。頭の片隅、予測できたことではあったけれど。なんとなくの、虚無感。何もしたくなくなった。どこかで情報が出てこなくてもいいかなあって。そう考える一瞬はあった。けれど、それ以上に、夜毎必ず夢を見て。あの同胞たちが語りかけてくる。真っ暗な空洞で。そうして、苦しくなつて。また歩き出すをやむを得なくなるのだ。

「そろそろ仕事探さないとなあ・・・」

「姉ちゃん、幾ら?」

「は?」

「いくらかって聞いてるんだよ。一回、だめか?」

「幾ら出すつもりだ?」

「額によるのか・・・手持ちはあんまりないからなあ・・・そう

だな、80000くらいかな」

「結構。それならいい。相手にする気はない」

「・・・はっ、このア」

「じゃあ、俺が200000出そうか」

黒髪の、妙に目の大きい人。つややかな髪は、まるで女性のよう。しかし、それを十二分に否定できるだけの筋肉が、その身体に纏われていた。

「あなた？何？」

「伝言を預かっているんだ。少し時間がほしい」

「分かった。ごめんなさい、私、こっちの人と行くわ」

「・・・分かったよ」

軽い舌打ちを含んで、さっきの男はさっさと踵きびすを返した。

「じゃあ、場所を変えよう」

「お金は結構」

「要らないの？」

「いいわ。そういうつもりじゃなかったし。伝言料、必要？」

「貰ってるし、追加で貰う予定だから、いいよ」

「うん、そう」

割と近くの路地の裏に入る。途中、壁のへこみを撫でると、そこは朽ちた木の扉が取っ手をなくして隠れていたようで――

――気味の悪い音を立てて、開いた。

妙に薄暗い光が入り込んでいて、ほこりっぽくって、変な空間だった。

「ヒソカから、預かった」

「ヒソカ・・・」

「彼、君を知ってるらしいけれど、合ってる？」

「合ってるわ。マリア、私よ」

「うん、よかった。率直に言う。ヒソカの元へ帰って」

「何で」

「探してる、結構、真面目だよ。何があったか知らないし、知っ

たこつちやないけれど。戻って、家で待ってるかも」

「そういう人なのかな・・・」

「多分、次は手段も選ばず、君を探し出すと思う」

「・・・」

「『言いたいことがある』って。直接、会って」

「・・・」

「一応、伝えたよ。俺も暇じゃないし、疲れたから」

「・・・」

「今から帰ったら、いるかもね。2時間ちよつと前に試験終わってたから」

「・・・」

「帰ったほうが賢明だと思うよ。君が痛い目、あいたくないならね」

「痛い目？」

「昔かなあ・・・気に入った子がいたと思うんだけどね・・・その子、割と直ぐに死んじやったね」

「死・・・」

「本能的に狩っちゃったのかな・・・もしかしたら、熟れたのかも」

「・・・」

「良いこと教えてあげるよ。ヒソカは青い果実にしか興味ないんだ」

「・・・」

「まだ死にたくなかったなら、帰ることだね。まあ、言ったからね。」

「あ、帰り道、分かる？」

「・・・うん」

「じゃあ、気をつけて」

「・・・」

「次、君の死体に出会わないことを祈るよ」
「・・・」

ずっと、すぐに消え去ってしまった。
私はまるで、死の宣告を受けた、患者のような、気分に陥った。

そして再会の

この道を忘れたわけではなかった。格別に、ややこしい道でもない。見通しの悪い、見落としやすい道でもない。ただ、何気なく暗い気持ちに支配されて。あまり帰りたくなかった。

自分の気持ちに、後ろめいたなにかを感じている。現在、進行形で。脅しに、ひれ伏した様な、そんなわけじゃないけれど。

心のどこかで望んでる。ヒソカは何か、知ってるんじゃないかって。クルタのことも、クラピカのことも。何か、知ってるんじゃないかって。心のどこかで、その幻の現実を望んでいる。お願い、そうであってって。

ヒソカの家の前についた頃には、辺りは少し暗くなっていた。

家の中から、小さな光が漏れていた。家の灯りはつけていないくせに、ランプの類はつけているらしい。全く、趣味の分らない男だ。

「ヒソカ」

「・・・おかえり、待ってたんだよ」

「・・・ごめん」

「食事の用意もできてる。食べよう」

「・・・うん」

「そんな深刻な顔しないで・・・毒なんて盛ってないよ・・・クツクツ・・・それともイルミになにか言われた？」

「・・・いいえ」

「そう」

嘘をも見抜きそうな顔をしている。思慮深そうな、瞳。

「ヒソカ」

「何？」

「言いたいことって、何？」

「・・・」

「・・・ヒソカ？」

「食事しながらにしよう」

「うん」

ヒソカに促されるがままに、テーブルにつく。ちゃんと用意された、温かな食事。なんとも、イメージ型破りな。

「そんなに意外だった？ボクだってちゃんとできるのさ」

「・・・意外よ、かなり」

「そうかい」

「・・・いただきます」

「どうぞ、召し上げ」

それからしばらく、沈黙の後、ヒソカがぼそつと話始めた。

「君の、仲間に会ったよ」

「・・・っ!？」

「赤い瞳の、そう、確か闇取引されている目を持つ、部族だっけ？」

「・・・」

「生き残りはいないはずだったけれど・・・狩り残しがあつたんだねえ」

「え」

「幻影旅団を追っているのかな？ならばやめたほうが良い。今の君なら、容易く折れてしまう」

「・・・折れやしないわ」

「いいや、折れるね。簡単に・・・」

「・・・すぐに死ぬって言いたい」

「その通り。賢いね、君は」

「それだけが言いたかったの？」

「そういうわけじゃないけれどね、まあ、そういう感じかな」

「・・・仲間って言ったわよね・・・」

「ああ、金髪の、男の子さ。君に良く似た」

「・・・（クラピカだ）」

「確か、クラピカっていう」

「・・・」

「会う場所と日時を指定している・・・君もついて来るかい？」

「ええ」

「即答だね、良いよ」

「・・・ときどき、ヒソカは分からない」

「・・・そう」

「どうして、そう、お節介をやくの」

「ん？」

「お金の為、手段を人は選ばないわ」

「・・・何も聞いてないようだね？ボクには金も、女も、何も必要ない。ボクがしたいのは人殺し」

「・・・聞いたわ、その類なら」

「うん」

「・・・それでも、私を殺して、この目を売れば一生遊んで暮らせるかもしれないのよ」

「興味ないね」

「・・・それは本心？」

「意思を持った君になら、興味を持てるけれど・・・死んだ君には興味ない」

「熟れ切った、私にも」

「・・・（イルミ随分、余計に話してるようだなあ・・・）それは能力の話かい？」

「さあ」

「うん、熟れきつたら、そうだね興味はもてないかも」

「殺してしまう？」

「君は分からない・・・どうだろうね・・・まだ分からない」

「・・・」

「君が選ぶと良い。良い事を教えてあげよう。ボクは君が想像しているよりもっと、残忍で、汚い人間さ。そのために、手段も選ばないからね」

「・・・誰だってそうだわ」

「・・・」

「誰だってそうよっ・・・私たちを滅ぼした、あの蜘蛛だって・・・手段は選ばなかった・・・村にいた全員の目を奪って・・・私は・・・」

「そうか、その生き残りが君たちふたり・・・かい？」

「・・・そう」

「ふうん（いい念の色・・・垂れ流してる辺り、修行すればきつと、とってもおいしくなるかも）」

「・・・」

うつむき加減の私を、ヒソカは笑みをたたえて、覗き込むように見ていた。

夢の中の明日（前書き）

イルミさんって、ひとりでベラベラ喋っちゃうイメージ。マシンガントーク。徹子さんのな？（笑）ごめんなさい・・・

夢の中の明日

「さあ、もう遅いから眠ろう」

「うん」

気分は最悪だった。ぐちゃぐちゃ。めちゃくちゃな気分。とつてもブルー。いや、あえて言えば、緋色か。鮮やかな、赤だ。

ヒソカの手招く先、寝室の扉が開けられていた。でも、今すぐに眠りたい気分じゃない。

「・・・どうかしたのかい？」

「シャワー、使っても良い？」

「もちろん。タオルは上から二番目の棚にある。使い終わったら、籠に入れてくれていたんで構わない」

「・・・ありがとう」

「どういたしまして」

クスッと笑みをたたえて、ヒソカはそのまま部屋に入ってしまった。

「・・・違和感あるよ・・・本当に」

シャワーを浴びて、寝室に入ると、ヒソカはいなかった。どこへ消えたのか。ほんの数十分の間だったのに。

少し躊躇しながらも、布団にもぐりこんだ。シーツは冷たい。やっぱどこかへ出かけてしまったのか。あの時と、同じだ。

「・・・（これじゃ帰ってきた意味ないんじゃない？）」

——別にここが私の家っていうわけでもないのに。

可笑しな話。

多分、夢なんだろうな。はっきりと分かったわけじゃないけれど、ぼやっと。そう思った。だって、こんなあり得ない。あり得ない。あったら困るし、何なんだろう、この居心地が悪いまでのこの感じ。何となく、くすぐったくて。変だ、変。

気がつけば、そこは芝生の広がる、広い場所だった。

「君の念は垂れ流した・・・うん、孔を開かないとだめだねえ・・・いいかい？今からボクの念を送る・・・そうしたら、君の念の孔は開かれるはず」

「念？」

「君が纏っているもの。いわゆるオーラさ。それを自在に変化させることで、強さが手に入る。念で形を作ったり、人などを操ったり、いろいろね」

ヒソカは愉快そうに、目を細めた後、そのまま私の背中に手を当てた。妙に冷たい手に、肩が一瞬、強張った。

「・・・じゃ、いくよ」

聞こえるけれど、小さな声で、ヒソカがさういうと、唐突に体中が変な感じがした。焼けるみたいな、熱い感覚。

「あっ・・・」

「集中して・・・イメージして・・・君の身体中に、空気をまとうイメージだ・・・そう・・・もっと・・・ちゃんとイメージして・・・ほら・・・うん、そう」

「・・・これ・・・」

「うん、それが念・・・これからちゃんとコントロールできるように練習しよう・・・ほら、漏れてきてるよ」

「あ」

「集中、集中・・・」

「ヒソカ」

どこからともなく、この前の黒い髪の人出现在了。ヒソカに親しげに話しかけている。

「・・・あ、イルミ・・・マリア、紹介するよ。ボクの友人、イ

ルミだよ」

「友人なの、俺って」

「違う？」

「・・・知らない。この前ぶりだね、おかえり」

「・・・どうも」

「念、漏れてるよ、また」

「あ」

「当分は、この繰り返しかもね・・・でも随分、変なところから始めたね・・・強制的に開いちゃうなんて、失敗したら、どうしたのさ」

「大丈夫、マリアは失敗しない」

「言い切れないよ」

「知ってるよ」

「まったく、いいけどさ、知ったことじゃないし。何？ヒソカは育成したいわけ？弟子がほしいの？」

「分からない人だなあ・・・」

「分かったつもりだけれどね。まあ、いいや・・・なんか、そういう本、読んだ気がする・・・東洋の文献に、そんな話があった気がするよ。自分の氣にいるタイプの子を育てちゃうって・・・まあいいけれどね」

「ふうん」

「殺しちゃだめだよ」

「分かってるよ」

「・・・ヒソカ・・・イルミも・・・あなたたちは、何なの？」

「ハンターさ」

「俺は暗殺が家業。殺しのプロってとこかな。これでも有名人なんだけれど？」

「・・・そうなの」

「で、君、クルタ族でしょ・・・知ってるよ。あれはお兄さんかなあ・・・ハンター試験に来てた、緋色の目の男の子・・・二刀流

で・・・まあ、結構芯のある子だったけれどね。君も鍛えたら、強い子になれるそうだね」

「イルミ」

「分かってる、横取りしないし、邪魔もしてないだろ、まだ」

「許さないからね」

「分かってるさ、分かってる・・・欲張りだよな、まったく。ゴンといい、マリアといい。勝手だなあ、この子が仮に近づいて、俺のキルアになんらかの影響を及ぼしちゃったら、どうしてくれるのさ」

「ないよ」

「言い切れる？」

「言い切れる。近づけやしない。マリアはボクの――」

夢だと分かっているながら、随分、緊張していたようだ。身体中に、汗がびっしょりとまとわりついていた。

「・・・っ・・・」

「目が覚めたかい？」

「・・・ヒソカ・・・」

「今日は出かけるとしよう」

「・・・どこに？」

「そうだなあ・・・広いところがいいかな・・・」

体中の血が、ぞわりと波打ったような錯覚を覚えた。

「念の修行？」

「・・・言っていたっけ？」

「夢を、見たの・・・ヒソカが、私の念の孔を開いた」

「・・・じゃあ、覚悟はできている？」

「ええ」

「そう、話は早い」

「ねえ・・・」

「何？」

「ヒソカにとって、私は、何？」

ヒソカはゆっくりと目を細め、口角をあげた。

夢の中の明日（後書き）

どうでもいいけれど、ヒソカ・・・世話焼きすぎな気がする。イメージ破り。でもきつと、もうすぐ変態化します。いろんな意味で。ここらへん、原作に忠実に（笑）

奇術師の戯言（前書き）

変態化注意報発令中？

奇術師の戯言

まるで、それは時間が止まったようだった。私には少なくとも、そう感じられたのだ。

「ヒソカにとって、私は、何？」

まるで、おもちゃでも見つけた子供のように、目を細めた。無邪気な子供のように、ニヒルに笑う。

「うーん・・・何だろうね・・・ボクにもまだ正直分らない」
「・・・分らないの？」

「うん」

「分からなくて、呼び戻したの？」

「イイだろう、別に」

一瞬、薄目を開けて、そう呟いた。それは間違いなく疑問系でなく、命令形の言い方だった。ときどきとる、そのマインドコントロールともとれる行動は、恐ろしいほど、精神に影響を及ぼす。おそらく、無意識のうちの仕草なのだろうが。

「・・・仕事中だった」

「仕事？」

「情報を探している・・・クルタ族の・・・緋色の目の行方」

「緋色の目の行方？」

「ヨークシンシティーのどこかに・・・競売にかけられていると聞いて・・・出てきたんだ」

「ああ、なるほど・・・ふうん、そう」

「・・・」

「なるほどねえ・・・クックック」

「イルミって人って、暗殺家業？」

そのままの笑みは絶やすことなく、ヒソカはあっさりと言い放った。

「うん、そうだよ」

「・・・そう」

「・・・どうしたんだい、いきなり・・・随分と気になるなあ・・・」

「・・・気にしないで」

「気になるよ」

「・・・夢を見たの・・・広い空間・・・野外だったわ・・・ヒソカが私の念の孔を開いて、修行の途中、イルミが来た。そうして、『ヒソカにとってマリアは何』って聞くの。そうして・・・終わりの。夢を見たの」

「夢は欲望を現すという。一種の占いのようなモノだろうねえ・・・君の潜在意識の中に、知らず知らずのうちに、その願望が植わっていた・・・」

「・・・ない・・・それは、だ」

「言い切れないだろう。心なんて、あるようでないものだからね。ボクはすぐに心変わりはいしない。珍しいだろう。これだとおもったら、おいしくなるまで、見届けたい。そうして、おいしくなって摘み取るのは、ボクの仕事だ。こんなにつまらない日常に、甘さをくわえてくれる、ボクの果実たち・・・君も、その一員じゃないか？」

「・・・何が言いたいのか？」

「君は、望んでいるんだろうって・・・率直に」

「何を」

「解放されたいんじゃないかい？もう、この生活から。見たところ、随分とあつてないみたいだね、同胞と。復讐の念を抱き続けるのは、そんなに難しいことじゃない。そうして、成し遂げるのも。」

君は、いつも眠りにつくたび、深い眠りにつくたび・・・目覚める「いつも、夢を見るからよ」

「そうだね、何を見ているか、ボクには分からないけれど。苦しんだらう？」

ヒソカの冷やかな目が、真っ直ぐに降り注いでくる。温かさなど、微塵もない。まるで、万年雪のような、視線。

「苦しい・・・だから、早く見つけないといっ」

「容易く折ってしまえる・・・」

ヒソカが不意に、マリアの腕をつかんだ。一瞬、その拳に力が入って、握られた手首は熱を帯びたように、急に熱くなった。圧迫からくる、熱。

「っっ」

「いい顔だ・・・うん、そうだよ、君はやっぱリイ・・・これからとっても強くなれるだろうね・・・その様子だと、強くなれる、間違いなく。今、摘み取ってもいい・・・一瞬で、苦しみから解放することだってできるんだよ、ボクも」

「いつ・・・」

「けれどね、今、摘み取ったら、楽しみが減るんだよ。君がどう成長していくのか、これからどういう道を選んでいくのか、とても気になる・・・何より、君たちはとても似ている・・・時々、あの熱い瞳がよみがえるよ。彼は、久しぶりにボクをゾクゾクさせた・・・ゴン以来さ・・・あんなにゾクゾクしたのは。エクスタシーの一步手前。美しいね、その憎悪・・・憎いかい？ 幻影旅団が」

「った・・・憎いにつ・・・決まってる・・・離せっ」

「離れたら、君は、逃げるんじゃないかい？」

「しないっ」

「分かった。信用しよう・・・」

「・・・」

離された腕は、真っ赤になっていた。よかった。ただ圧迫されていただけだ。軽く動かして、骨の類が可笑しくなっている様子はなかった。

「今、はっきり言うよ。今までオブラートに包んできた。もちろん、イルミにも」

「・・・」

「君は、ボクにとって、バンジーガムみたいなね・・・胸焦がれる感覚に陥るわけさ」

また、ヒソカが何事もなかったかのように、無邪気に笑った。
私は、蜘蛛以上に危ない人間に好かれてしまったようだ。

奇術師の戯言（後書き）

ヒソカの技の、バンジーガムって、ヒソカ自身が子供の頃に好きだったお菓子の名前からきてるそうですね・・・
お菓子を食ってるヒソカ・・・想像できない・・・

あ、感想下されば嬉しいです。
執筆意欲もすっごい湧きます
単純人間なんで

ちなみに布袋、念の系統を診断してみたら、「特質系」って出ましたよ。

そんな性格らしいです・・・って分かりづらいか・・・

懐かしい背中（前書き）

今回はクラピカ視点で〜
♪

随時感想おねだり中

懐かしい背中

ハンター試験も終わってから、念の存在を知った。そうして協会のほうから念の師匠を紹介してもらって、修行を始めようと思っていた。しばらく、山か、どこか人里はなれたところに籠るようだが、そのための日常品は欠かせないだろう。思い立ったら吉日、早速買い出しに赴いた街で、懐かしい背中を見つけた。

くたびれた風の、スーツ姿。心の内、まだあのスーツを着ているのかと、笑いそうにもなったが。そういう自分もこの服を着ているわけだからなんともいえない。

「レオリオ！」

「・・・お」

「久しぶりだな、レオリオ」

「だな、どうしたんだ、こんなところで」

「買出した、もうすぐ修行に入る」

「修行？」

だらしなく、少し下げられたサングラスの奥で、彼の目は怪訝そうに揺れた。

「念の修行だ。ハンター協会から紹介してもらってな。近々、修行に入るのだよ」

「そうか、大変そうだな」

「勉強ははかどっているか？」

「うん、や。まあ、ぼちぼち・・・参考書にちよいと足らんところがあつてな。書店に寄ってたところだ」

「そうか」

「一杯、茶でもどうだ？」

「構わないが。どうした、いきなり」

「いや、試験終わってから、どうも懐かしくてな・・・お前らのこと」

「・・・私もだ」

どこか照れくさく笑うレオリオに、素直に好感が抱けた。あんなに濃い時間を、初対面の彼らと過ごしたのだから、愛着の類だのなんだのがわくのは、珍しいことではないだろう。寧ろ当たり前の精神的な反応だと、考えるべきだろう。

「俺、コーヒー以外が飲みたい気分なんだが」

「私は何でも良い」

「そうか」

喫茶店は、恐ろしいほどにガラガラだった。午後4時という、微妙な時間が幸いしてか。店内には、マスターと、数人の客が、いるばかりだった。

「いらつしやいませ」

「オレンジジュースで」

「私はココア」

「かしこまりました」

「ココア？」

「何だ」

「意外だったから・・・すまん」

「構わない」

「・・・で、改めて、ヒソカどうなんだ？」

「なぜ私に聞く？」

「コンタクトはあったのか？」

「（接触のことか？）いいや、なかった」

「一度も？」

「まあな」

「・・・」

「ヨークシンで会うことになっている」

「・・・会ってどうするんだ」

「それはいえない。レオリオの首を突っ込む必要もないところだ」

「・・・妙な言い回し、やめろ」

「すまない、そういうつもりはなかった」

「・・・あつさりだな・・・お前、そなんだったか？」

「ああ、こんなんだったさ」

「随分とねじれてるなあ・・・分かりづれえ・・・家族もたいへん・・・あ、すまん」

「構わない。ジョークだろう？お前のことは理解しているつもりだ・・・家族は今、ひとりしかないない」

「ひとり？」

「同じクルタの血を引く、女性だ・・・復讐の為、村で別れて・・・一度や二度は、情報の交換のため、定日に会っていたが・・・ある日、私の仕事で長引いて・・・いけなかった・・・それ以来、会っておらぬよ」

「・・・そうか」

「懐かしいついでに、彼女にも会いたいものだ」

「・・・名前・・・」

「マリアという・・・私に良く似た女性だ」

「・・・ん？お前、そつくり？」

「ああ」

「・・・」

「今、妙な想像しただろう」

「してない」

「お前はそういうヤツだ」

私は見逃さなかったぞ、口の端がつりあがるのを。

「酷え・・・ちよつとくらいいいじゃねえかよ」

「（やはりか）・・・まあ・・・そうだな・・・うん・・・気分は悪いが」

「誰もお前にしたわけじゃないからな・・・ただ、お前の顔を借

りてちよいと・・・」

「気持ち悪い！会わないうちに変わったな、お前！」

「は？！」

「お前、随分と変になっているぞ！自覚はないのか、男たるもの、恥を知れ、恥を！」

「・・・お前も変わったなあ・・・」

「・・・あ、すまない」

「構わねえよ、別に」

「話が思いのほか、進まないな・・・こんなつまらない言い争いに時間を費やすつもりはなかったんだが、つい・・・試験の癖が抜けないらしい」

「まあ、仕方ないさ」

やはり、この男は良いヤツだ。金だ、金だとばかり言っていたが、少なくとも私には、とてもそうは見えない。やはり良いヤツだ。

懐かしい背中（後書き）

夜9時を回った辺りから、私の脳内活性化・・・可笑しい会話のオンパレード。

また明日にします。

話がずれてもイヤだから。

心の深くの不安

手に持ったカップを、愛でるかのように撫でる。何度も、何度もそうして、記憶の深く、はるか昔のクルタに思いを寄せる。

「あまり話せないが・・・少し、レオリオにも話しておこうと思う」

「・・・ああ」

「私はこの命を今回の修行で、かけようと思う」

「・・・は・・・おま・・・」

「構わない。仲間の目が入るならば、そのために死んでも、悔いは残らぬさ」

「・・・おい・・・」

「レオリオ、戯言ではなく、これは」

「ふざけんなよ、お前。残される人間の身にもなってみろっ」

「お前に何が分かる！全てはクルタのためにっ・・・この命、ひとつなど惜しくはない。それは、彼女も同じだ。同意の上だ。クルタの瞳のために、残りの命をささげる」

「・・・復讐のためだけに生きるなんぞ、虚しいだけだぜ」

「それは十二分に分かっている」

「じゃあっ・・・」

「分かっている。けれど、これは誓ったことだ・・・決めたことだ・・・」

「・・・そうかい・・・」

不意に、柔らかい表情になって、笑みをこぼした。まるで諦めたかのような、そんな半分疲れ切った笑顔。それじゃあ、まるで『お前を説得するのは諦めた』と言われているようではないか。そんな表情を、急にされると、妙な気持ちになるではないか。居心地の悪いような、落ち着かないような。

「私には、それしかできない」

「・・・」

「復讐だの、蜘蛛だの、何だのって・・・あの時からずっと思い続けていたが・・・日に日に怖くなる・・・もし私が復讐を果たし、目を全て集めて・・・あの丘に葬ったら・・・私はどうしていいのか、分からないのだよ・・・可笑しな話だ・・・こんなに今、焦っているのに、分からないんだ・・・その後、どうすればいいのか」

「・・・クラピカ」

「レオリオ、私は分からない・・・考えた・・・私から復讐が消えてしまったら・・・何・・・もない・・・何も残らないんだよ」

「クラピカ」

「・・・」

「俺も、ゴンも、キルアも・・・いる。お前がどうなろうと、いる」

「・・・すまない、気を遣わせて」

「気じゃない・・・^{ガチ}本当のことだぜ」

「・・・ありがとう」

不意に目の前が曇る。どうやら、いつの間にか、涙を流していたらしい。少し目の辺りが熱くなった。まさか、こんなことになるうとは。コンタクトが涙で浮いて、動きそうで怖い。

「大丈夫か？」

「平気だ」

「・・・」

「すまない、心配をかけたな」

「そういうんじゃないよ・・・」

「・・・フツ」

「な、何だっ」

「顔に丸出しだぞ・・・フツ・・・フフツ・・・お前、分かりやすいな、やはり」

「うつせえ」

「だが、そういうところが私は好きだ」

「・・・うつせー、妙な感じがするからやめろ」

「そのうち、マリアにも紹介しよう。友人が出来たと」

「ああ」

「・・・さて、私はもう失礼するよ・・・買出しの途中なのでな」

「ああ、俺も行く」

「そうか」

「今日はありがとな」

「いや、それはこちらの台詞だ。随分と救われたよ、お前には。

礼を言う、ありがとう」

「・・・ドウイタシマシテ」

「何だ、どうした」

「お前にそんなに素直に礼を言われると照れる」

「・・・悪かったな、珍しくって」

「・・・」

「では、またな」

「ああ、じゃあな」

「・・・」

街の中に消える、懐かしい背中。私は、随分とお前に救われたよ。随分と、久しぶりに幸せな気持ちになることができた。お前にこんな精神の安定の効果があるなんて。驚いたよ、かなり。

黄昏のときに、やっと私は落ち着くことができた。妙な焦燥感は、既にそのときは消え去っていた。

心の深くの不安（後書き）

あ、告白しちゃった、みたいな。

まあ、そういう意味じゃないですけど

脳内はなおってないみたいです。

ただいま、午前3時・・・起きて直ぐ執筆はいかんですね。

誓いの印

ヒソカのせいで、随分と疲れきった。あんな人間だとは、正直、思わなかった。まさか本当に、殺人とかそういう類に興奮を覚える人間がいるとは。

少なくとも、ヒソカはそういう類だろう。

さっき握られた手首が、少しずつ青っぽくなってきた。折らなかつたとはいえ、ここまで強く握るだなんて。本当によく分からない人だ。何を考えるでもなく、私はヒソカに視線を向けた。

「どうかした？」

「出かけてくる」

「・・・そう」

「戻るから・・・半日以内には」

「そう」

「闇市に」

「そう」

「・・・行つて来ます」

「うん、待ってるよ」

「はい」

クラピカが今、この状態を見たら、どう思うんだろうな。外は妙に冷えた風が吹いていた。

闇市には色々な店がある。それが、違法だったり、合法だったり。パターンは色々だけれど、おおよそは違法ギリギリセーフだ。その中のひとつに、ある店があった。以前から気にはかかっていたのだが。入ってみる勇気がなかった。その店の名は『青屋』。

朽ちかけた扉を開ければ、店主らしい、でぶつとした男が顔を出

した。

「いらつしやい・・・何を希望だ」

「ここは・・・」

「分からず入ってきた客か・・・ここは刺青屋だ・・・いらんなら出て行ってくれ・・・」

「用がない訳じゃない・・・幾らだ」

「・・・一回につき7000」だ」

「何でも、か」

「ああ。デカさによるがな。よっぽど面倒じゃなけりゃ、7000で結構」

「・・・では、頼む」

「どこに入れるつもりだ」

「自分で見えて、尚且つ、分かりやすい場所に」

「・・・腕なら、分かりやすいぞ」

タバコをふかしながら、男は言った。

「・・・いや、やはり・・・ああ・・・いいや、ここに入れてくれ」

「・・・正気か」

「構わない」

「俺は自慢じゃねえが、この道は長いから・・・多分、失敗はしねえとは思うが・・・仮に失敗したら・・・」

「構わない、入れてくれ」

「・・・知らねえぞ、どうなろうと」

「ああ」

身に纏っていた上着を脱ぎ去り、上半身をさらけ出した。

男が一瞬、つばを飲んだのが分かった。くそつたれ。そう思いつつも、仕方ない。所望したのは私だ。

「・・・何を入れる」

「蜘蛛をナイフか何かでつぶしたヤツを入れてくれ」

「・・・分かった。サイズは」

「直径6？くらいで」

「分かった」

男は躊躇することなく、心臓の上の皮膚にどんどん、掘り進めていった。血が少しずつ垂れ、また垂れ。掘り進めるたびに、その傷はやがて熱を発し始めた。焼けるように、熱い。そんな感覚も段々と、じんわりとした、おぼろげな痛みに変わる。それから数時間で、色まで入れ終えた。

「ありがとう」

「御代はいい」

「・・・は」

「お前さんみたいな、綺麗な皮膚に刺青を入れたのは、久しぶりだ。気持ちよかったし、楽しかった。御代はいいよ。また色が抜けてきたら、来たらいい。入れてやる」

「そうか、すまない」

「・・・名前は？」

「・・・マリア」

「・・・待ってるぞ、マリア」

「・・・ああ」

私の返事に、男はその蓄えたひげに手をかけて、にやつと笑った。それは妙に温かさを含んでいて、どこか昔の父を見たような錯覚さえ覚えた。

誓いの印（後書き）

段々、マリアがクラピカ化してきたような・・・
話し方が

そして心臓の上に、刺青入れちゃった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3890z/>

緋色の記憶

2011年12月18日08時50分発行